

ana-logue



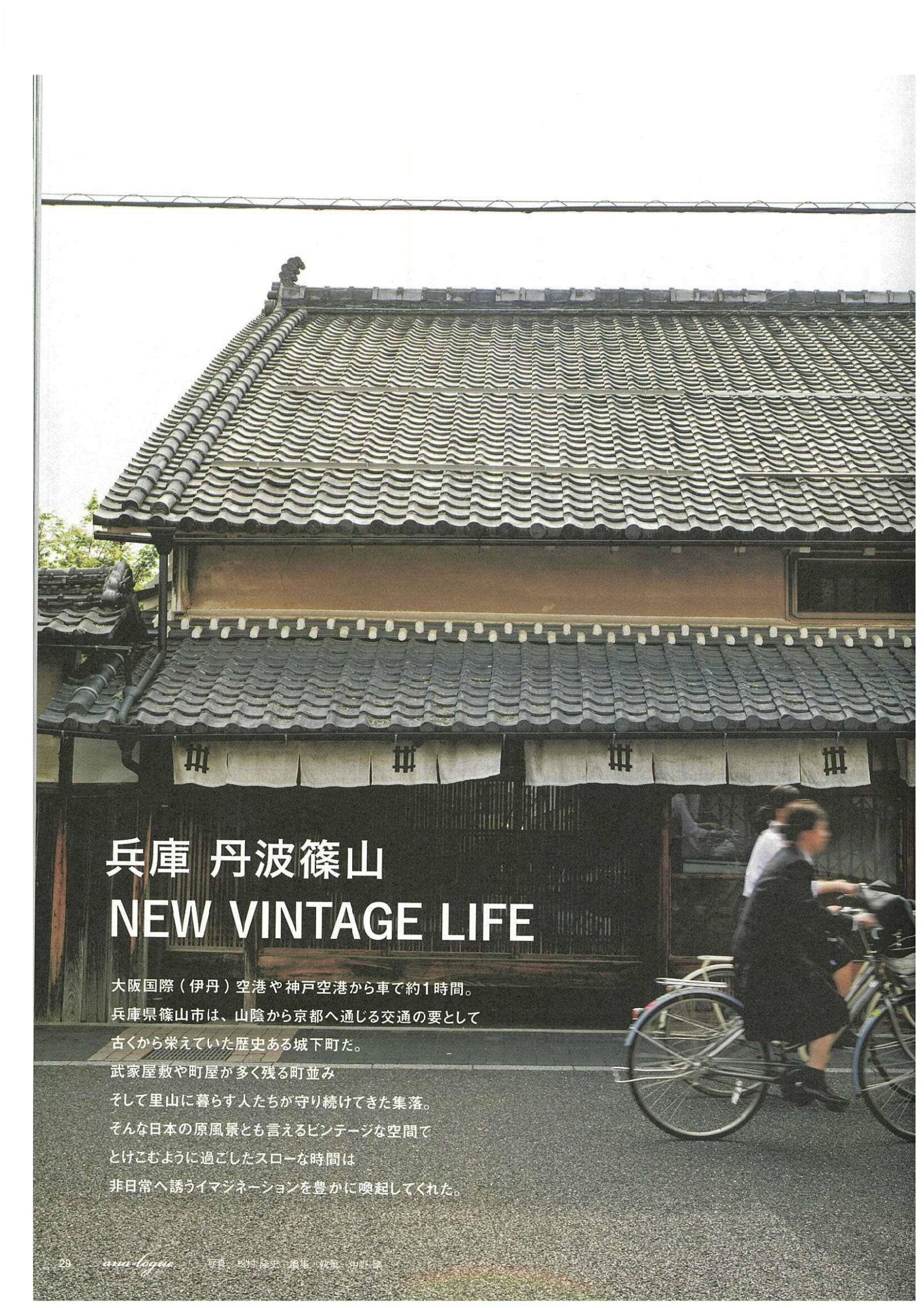
NEW WAVE 香港

兵庫 丹波篠山
NEW VINTAGE LIFE

UL(ウルトラライト)という遊び方

ANA Inspiration of JAPAN

A STAR ALLIANCE MEMBER



兵庫 丹波篠山 NEW VINTAGE LIFE

大阪国際（伊丹）空港や神戸空港から車で約1時間。

兵庫県篠山市は、山陰から京都へ通じる交通の要として

古くから栄えていた歴史ある城下町だ。

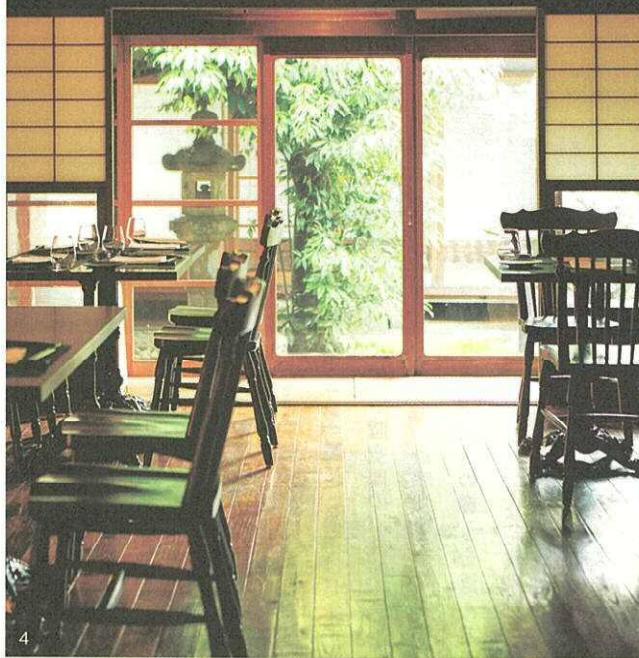
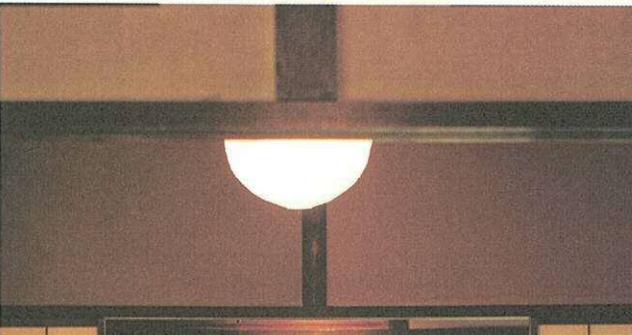
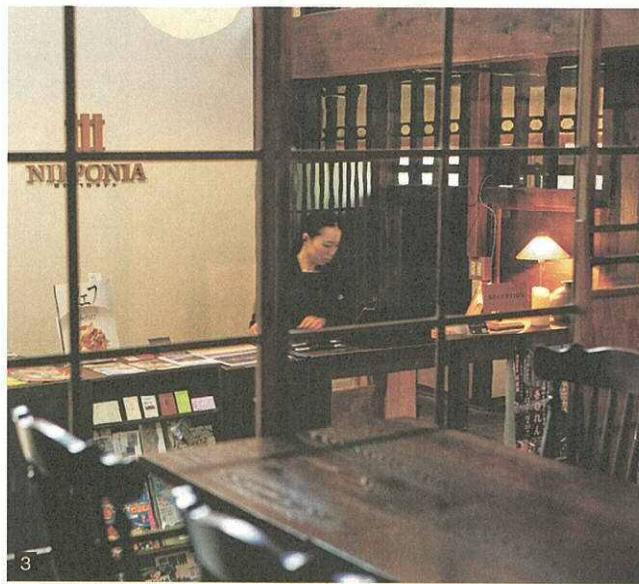
武家屋敷や町屋が多く残る町並み

そして里山に暮らす人たちが守り続けてきた集落。

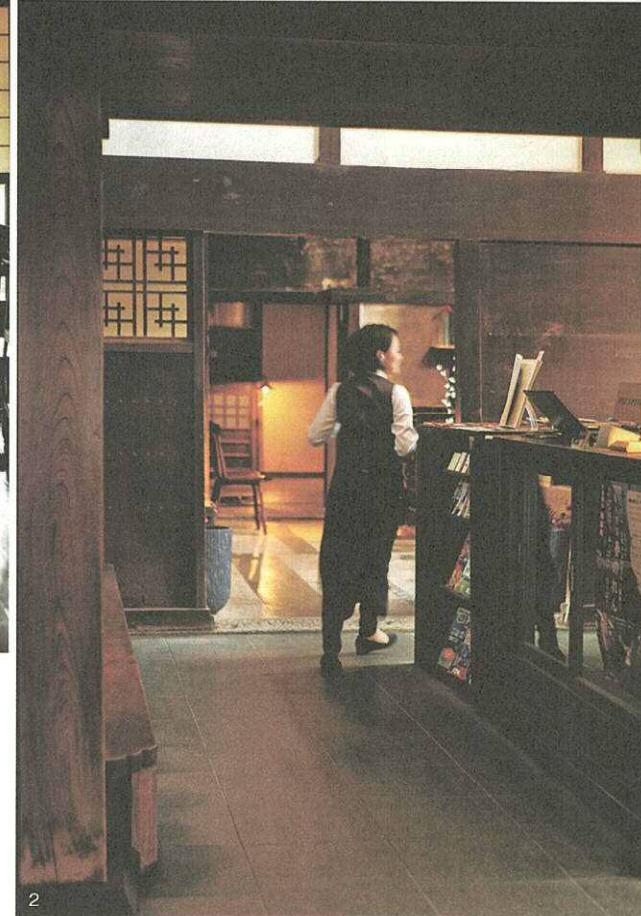
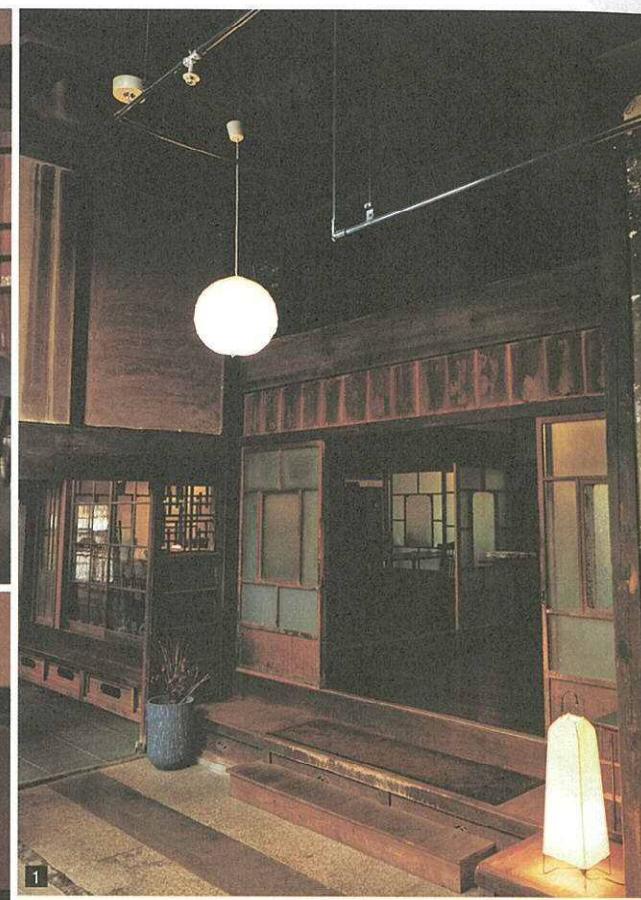
そんな日本の原風景とも言えるビンテージな空間で

とけこむように過ごしたスローな時間は

非日常へ誘うマジネーションを豊かに喚起してくれた。



①② エントランスホールの吹き抜け部分。手前の土間スペースは、もともと炊事場として使われていたところ。関西で「おくさん」と呼ばれるかまどや滑車付きの井戸がそのまま残っている。また、篠山エリアで活動するアクセサリーデザイナーやクラフト作家、丹波焼の職人などの作品を紹介した展示スペースにもなっている。③宿泊棟が点在する「篠山城下町ホテルNIPPONIA」の受付は、このONAE棟で行われる。スタッフのホスピタリティはハイレベル。④ONAE棟には、関西フレンチの巨匠、石井之悠氏がグランシェフを務めるフレンチレストランも入っており、地元の食材にこだわったフレンチを楽しめる。ランチ、ディナーのみの利用も可能。予約や問い合わせは、右ページ「篠山城下町ホテルNIPPONIA」と同じ電話番号へ。



ビンテージな空間の周波数に 五感をチューニングする

篠山城下町ホテルNIPPONIA(ニッポニア) ONAE棟

「篠山城下町ホテルNIPPONIA」は、篠山城を含む城下町全体を「ひとつ」のホテルに見立てるという構想のもと、明治から昭和に建てられた歴史的に価値の高い5つの建物からなる複合宿泊施設。客室は合計12室。5つの宿泊棟のなかで最大規模となるONAE棟は、360坪の敷地を誇る元銀行経営者の住居で、総合受付と5つの客室のほかレストランも備える

〈住所〉 兵庫県篠山市西町25番地

〈電話〉 0120-210-289

〈URL〉 <https://www.sasayamastay.jp>

Interview

ヨーロッパの旧市街に引けを取らない 価値ある日本の歴史的資源を未来へ

「篠山城下町ホテルNIPPONIA」やP36から紹介する「集落丸山」などをプロデュースする一般社団法人ノオトの金野幸雄さんに、城下町ホテルが実現した背景や、古民家を活用したまちづくりに対する想いをうかがった。

「2009年に法人を立ち上げ、最初に手がけたのが『集落丸山』です。同時に城下町でも古民家を改修した店舗をいくつか作りました。城下町全体を面で捉え、『ひとつのホテル』に見立てる構想が生まれたのもその頃です」

そこで注目したのが、歴史のある小規模な村

や町で暮らすように泊まれるイタリアのアルベルゴ・ディ・フェーズ（分散型宿泊施設）だった。キヤバ

シティの小さい城下町の古民家でも、分散すればヨーロッパ並みの旧市街や田園のオーベルジのある世界が、日本にも到来することになるはずです」

と金野さんは語る。古民家、集落、町並み、

コミュニティ。失われつつある日本のビンテージを再生し残すことは、懐かしくも新しい「これから

の日本の暮らし」を作ることなのかもしれない。

一般社団法人ノオト 代表理事 金野幸雄さん



金野さんが代表理事を務める一般社団法人ノオトは、古民家再生支援サービスやまちづくりの計画策定、地域プロモーションなど幅広い事業を手がけている。篠山エリアでは「篠山城下町ホテルNIPPONIA」やP36から紹介する「集落丸山」のほか、竹田城の麓に位置する酒造場をリノベーションした「竹田城城下町ホテルEN」などもプロデュース。また「篠山城下町ホテルNIPPONIA」をフラッグシップとするNIPPONIAブランドは、千葉県香取市の「佐原商家町ホテル NIPPONIA」や奈良市の旧市街「ならまち」の旧酒蔵など全国で展開している

〈URL〉 <http://plus-note.jp>



明治時代の豪邸で過ごす非日常

頭をぶつけないように、表通りに面した摺（すり）上げ戸の小さな格子玄関を慎重にくぐる。屋内はやや薄暗い。少し遅れて網膜の感度がその暗さに慣れる。そこに思いのほか奥行きのある空間が広がっていることに息を呑む。この何気ない一瞬に、意識は日常を離れ、五感がビンテージな時空間の周波数に同調し始めた。

自然光を柔らかく反射する使い込まれた土間。鉛色の輝きを湛えるエイジングの利いた什器。いろいろな時代の日常を煮詰めて染みこませたような、黒く鈍く光る太い染。ホテルのエントランスロビーを構成する古いマテリアルたちが放つ、独特の光が美しい。

ONA E棟は、明治時代に建てられた元銀行経営者の住居を、当時の趣を残しながら改修された建物。360坪の敷地には、中庭を開むように主屋と離れ、そして土蔵が配置されている。我々が宿泊したのは、奥まった位置にある離れの101号室。座敷と主寝室、二間続きの和室には、新しくて快適なベッドや空気清浄機、バス、トイレが備えられている。だが、長い時間を重ねた素材や意匠に包まれた現在の日常のほうが、どこか遠くの時代に思えてくるから不思議だ。どうやら五感のチューニングが完了したようだ。夕食がてら、のんびり散歩でもしてみよう。昼間とは少し違う城下町の風情を探しに。